

第1章 郷土の歴史

第1節 原始時代の長崎県

MEMO



1 洞くつのくらし



泉福寺洞くつ

(提供:佐世保市教育委員会)

(1) 中学生の大発見

1969(昭和44)年、佐世保市立大野中学校郷土研究部の生徒たちが、遺跡をさがそうと佐世保市瀬戸越を調査していたとき、半ば土に埋もれてい

た四つの洞くつを発見した。これが1986(昭和61)年、国の史跡に指定されることになった泉福寺洞くつである。

この中学生の発見から1年後、発掘調査が始まった。発掘は10年かけておこなわれ、多くの貴重な遺物が出土した。

一番下の層からは、旧石器時代のナイフ形石器が出土し、その上の層からは、豆粒状の粘土をつけた土器が、多くの細石刃とともに出土した。これが「豆粒文土器」で、まだ土器がつかられていない時期だと考えられていた約1万2千年から1万3千年前のものであるとわかり人々をおどろかせた。

(2) 豆粒文土器をつくった人々のくらし

泉福寺洞くつは、南向きのがけの下にぽっかりと四つの穴が開いている。洞くつは、冬は暖かい光がさしこみ、夏はひんやりとしている。洞くつ下の谷底には水がわき出ている。がけの上からは相浦川の広い谷や丘を見わたすことができる。

この洞くつに住んでいた人々は、相浦川沿いの野山でけものをとらえたり、木の実を取ったりしてくらしていたのだろう。

豆粒文土器とともにたくさん出土した細石刃が、そのことをよく物語っている。

MEMO

細石刃は、幅が数mm、長さが2～3cmの小さな石器で、動物の骨や角にほった細い溝にうめこみ、槍の刃として用いる部品である。

豆粒文土器には黒いすすがついており、洞くつの入り口にある炉で煮炊きをしていたことが考えられる。

泉福寺洞くつの人々は、近くにある粘土を使って土器をつくった。しかし、つくるのに慣れておらず、焼き上げる温度が低いためもろかった。

それでも土器がつくられたことによって、水をくみ、煮炊きをし、物を貯蔵することができるなど当時の人々の暮らしを豊かなものにした。

(3) 旧石器時代の長崎県

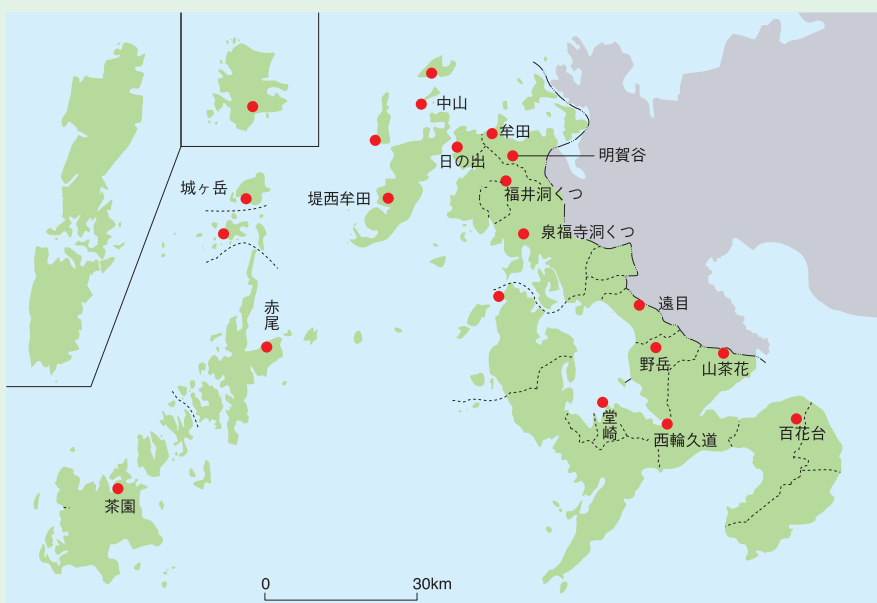
県内の遺跡で、年代がはっきりしているのは佐世保市吉井町の福井洞くつである。

ここからは、隆起線文土器が多くの細石刃とともに出土し、この遺跡が旧石器時代と縄文時代とをつなぐ貴重なものであることが確かめられた。一番下の層から発掘された石器は両面が加工されてい



豆粒文土器

(提供:佐世保市教育委員会)



旧石器時代の主な遺跡分布

MEMO

て、3年以上も前のものであることがわかっている。

泉福寺洞くつや福井洞くつのある北松浦半島には洞くつが多い。旧石器時代から縄文・弥生の各時代、さらに、それ以後も人の住まいとして使われてきたことが出土品からわかっている。

そのほか、^む蒸し焼き用の^{しゅうせきろ}集石炉のあとをはじめ、約20万点にもおよぶ石器などが発掘された^{くにみ ひゃっかだい}雲仙市国見町の百花台遺跡など、県内で300もの遺跡が発見されている。



2 海辺の暮らし



佐賀貝塚 骨角器

(提供:対馬市教育委員会)

1985(昭和60)年、対馬市^{みね さか}峰町佐賀で、縄文時代の^{かいづか はくつ}貝塚の発掘調査がおこなわれた。貝塚からは、貝や動物の骨などのほか、縄文時代後期(約3,500年前)の^{じゅうきよあと}住居跡や人骨が発掘されるとともに、土器や骨角器、石斧、石鏃(矢じり)がたくさん出土した。この佐賀貝塚は、海に生きる西日本の縄文人の暮らしのようすを明らかにするうえで貴重なものとなった。

(1) 佐賀縄文人の暮らし

春は、水ぬるむ季節である。縄文人の活動も活発になる。入り江のおくの海辺にいくつかの住まいが並んでいる。家は、地面に掘った穴に柱を立て、かやなどで屋根をふいたものである。

みんなで考えてみよう!

海辺に住む縄文人のくらしはどのようなものだったのだろうか?

MEMO

人々は、浜や海へ出かけ、わかめ、ひじきなどの海藻^{かいそう}や、すがい（巻き貝の一種）、さざえなどをとった。佐賀の縄文人は素もぐりの名人だったようで、よほど深くもぐらなければとれないような、いたや貝、ひおうぎ貝などの貝類が多く残されている。とれたものは、その日のうちに食べてしまうだけでなく、保存食としても蓄^{たくわ}えた。煮炊^{にた}きや貯蔵^{ちよぞう}用には土器が使われた。また、動物の骨でつくったあわびおこしも見つかった。

夏は、漁の季節である。魚は貴重な食料であった。佐賀貝塚からはたくさんの魚の骨が出土した。さめ、まだい、いしだい、ぶり、こぶだいなど大きな魚ばかりであった。また、くじら、いるかなどの骨もみつかった。

縄文人はどのようにしてこの大きな獲物^{えもの}をとったのだろうか。貝塚からは、しかやいのししなどの骨でつくられたつり針、銚^{もり}などの骨角器が約500点出土している。つり針は、おもにいのししのきばを材料として作られた。棒の先につけた鋭くとがった銚をもつて縄文人は丸木舟^{まるきぶね}で海に出かけた。舟の上から、あるいは海にもぐって魚を突いてとったのである。縄文人の工夫や技術の高さにおどろかされる。まさしく、佐賀貝塚の縄文人は海に生きる人々であった。

秋は、実りの季節である。同時に冬への備えの季節でもある。住まいのすぐ後ろまで山がせまっている。人々は山に出かけ、どんぐりやしいの実など山の幸^{たくわ}を蓄えた。

また、蓄えの仕事の間には、山からかたい石を運びだし、石斧^{せきふ}作りに精を出していたらしい。この小さなむらの住居跡からたくさんの石斧^{はつくつ}が発掘されている。

冬は、狩りの季節である。寒さの厳しいこの季節は食料となる植物が少ない。そこで、手に弓矢を持ち、島内の山々に分け入って獲

物を探した。冬をこす動物の肉には脂^{あぶら}がよくのり、毛皮も最も質のいい時期である。草木が枯れて見通しもよくなるので、狩りにもよい季節であった。



佐賀貝塚 黒曜石と石鏃

(提供:対馬市教育委員会)

MEMO

(2) 縄文人の交易

佐賀の縄文人は、海を渡って積極的に各地と交易をおこなっていた。

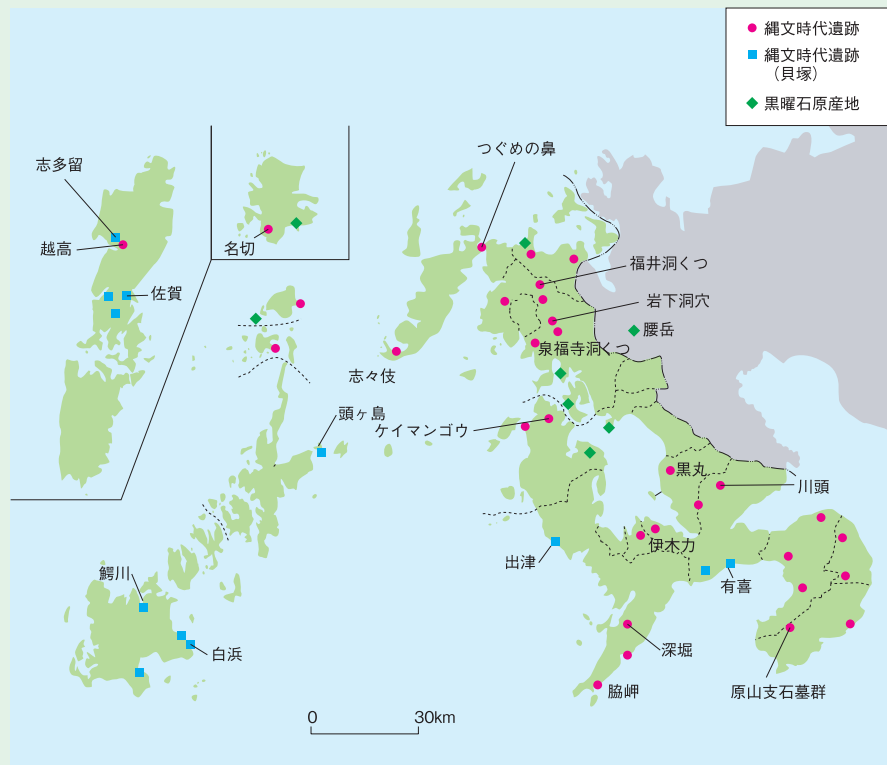
貝塚からは石斧が多く出土している。これはこのむらからの交易品の一つと考えられる。また、石斧のほか石鍬せきぞくの材料となる黒曜石こくようせきも多く出土している。この黒曜石はほとんどが佐賀県伊万里市の腰こし岳だけのものである。

これ以外にも、朝鮮半島以北に住むしかの一種キバノ口の骨で作ったペンダントや、沖縄産の貝おきなわのアクセサリーが発見されている。これらのことは、佐賀の縄文人の交易の広さを物語っている。

(3) 縄文時代から弥生時代へ

今から2千数百年前、縄文人の生活にも新たな変化があらわれはじめた。

大陸との交易によってもたらされた稲作は、それまでの縄文人の生活を大きく変えた。縄文人はより安定した生活を求めて縄文時代晩期から農耕を始めたのである。自然にたよるだけの生活から自然に積極的に働きかける生活へと変わっていった。約1万年続いた縄文時代は終わり、弥生時代が始まるのである。



縄文時代の主な遺跡分布